

CONTENTS

緊急連載『ARCHITECT』は必要ですか？	中澤賢一	2
自作自演228	鈴木俊之	3
わたしのとおき⑦	大橋康孝	3
過去掲載記事を振り返る 松村正恒		4
第35回 JIA 東海支部設計競技 1次審査結果	間瀬高歩	6
JIA 静岡発 建築ウォッチング in 葉山		
遠藤新、アールト、吉田五十八の建築を見学	高島ゆかり	7
JIA 愛知発 Nagoya Archi Fes 2018 vol.5 「栗原健太郎」		
材料から敷地まで、建築の土台から設計を考える	中渡瀬弘司・西尾菜歩子	8
JIA 愛知発 住宅研究会 連続環境セミナー2018序章・第1章	竹中アシュ・宮坂英司	9
JIA 愛知発 法人協力会2018年度第1回 CPD 研修会		
「環境・エコ・災害対策に向けた各社の取り組みについて」	酒井良和	10
JIA 三重発 森岡茂夫氏講演 地域・創生 防災は活動の入口	村林 桂	10
JIA 岐阜発 岐阜地域会2018「JIAの窓」 手嶋保氏講演会		
一軒の家から	大瀧繁巳	11
理事会レポート	石田 壽	12
東海支部役員会報告	浅井裕雄	13
保存情報 第205回 細久手宿と尾州家定本陣大黒屋	野々川光昭	14
忠節用水分水樋門（ロボット水門）	山上 薫	14
Bulletin Board		15
地域会だより		15
編集後記	伊藤彰彦・山崎太資	16

設計図は語る 9

御嶽教室生三重支教会

奥野建築事務所（1964年〔昭和39年〕設立）

父の晩年の頃の設計です。千木や鰹木が特徴的で、神道の影響が見て取れます。設計図で千木は内削ぎですが、実物は外削ぎでつくられており、11本の鰹木が載せられた屋根は、今は緑色に吹いています。社殿は、神殿・内陣・外陣を配置し12.74mスパンを鉄骨で飛ばし、内部は木組みで入れ子のような構成です。事務室棟は木造2階建てで、社殿と渡り廊下で結んでいます。設計図はそれぞれタッチが異なるため、矩計図は本人が描いていたかもしれません。

公務員から独立して事務所を立ち上げましたが、設立当時の桑名に設計事務所は他に1社しかないと聞いています。そのためか携わった建物の数は大変なもので、残っている図面資料も相当数です。どんなご縁でこの仕事を、何を考え、何を想っていたのでしょうか。男の親子は会話も少なく、当時私は学生で上京しておりました。



竣工写真

所在地…三重県桑名市
竣工…1985（昭和60）年
構造…鉄骨造平屋建て、木造2階建て
延床面積…732.038㎡
設計監理…奥野建築事務所 奥野美好

奥野美樹（JIA 三重） |
奥野建築事務所



ARCHITECT存続の危機!?!／ついに休刊!?!／30年の歴史に幕、廃刊か!?!

ご意見下さい、会報誌『ARCHITECT』は必要ですか？ 東海支部会員のみなさまへ重要なお知らせです

突然ですが、東海支部会員のみなさま。東海支部独自の会員サービスとして、皆さまのお手元に届いている会報誌『ARCHITECT』が存続の危機にあることをご存じでしょうか？

この緊急連載は、今後『ARCHITECT』がどうあるべきかを、支部会員の皆さまと考えるため、『ARCHITECT』に関わるさまざまな情報を、あくまで客観的に提供する連載です。

前回11月号では、『ARCHITECT』創刊の経緯とその意図、当時の誌面構成や状況を、歴代会報委員長の森鉦一さん、森口雅文さんへのヒアリングを元にお伝えしました。

また、会員の皆さまへ『ARCHITECT』の今後に関する意見を求めるアンケートを同封しました。グラチェックの11/15時点で170人の皆さまに回答いただいています。

そこで、今回は支部会員外の外部の方々からの『ARCHITECT』に対する評価をお伝えします。

5. 法人協力会から見たARCHITECTの意義

『ARCHITECT』発行に際し、広告掲載により多大な協賛をいただいている法人協力会各社が、『ARCHITECT』にどのような意見を持っているのか、各地域会からのヒアリングの結果です。

○『ARCHITECT』の取扱い

- ・誌面はざっと目を通す程度で、熟読はしていない。
- ・お世話になっている会員が執筆している際は、興味深く読んでいる。
- ・担当社員だけでなく、毎月全社員へ回覧している。

○『ARCHITECT』の利点

- ・『ARCHITECT』への広告掲載は、支部全会員にアピールできる唯一の手段である。掲載＝商品採用ということまで期待できなくとも、今後も続けてほしい。
- ・お世話になっている会員の執筆後は、営業の話題として活用できる。
- ・コミュニケーションツールとして継続発行してほしい。会社のアピールに役立っている。
- ・『ARCHITECT』はカタログとは違い、読み物として良い。

○『ARCHITECT』への不満

- ・『ARCHITECT』への広告掲載はメリット(対費用効果)があるとは言えない。
- ・法人協力会の工場やショールーム見学などを、事業報告として記事にさせていただくのはありがたいが、商品PRなどに活用するには、内容として弱い。
- ・協会会通信の執筆は荷が重い。

○今後の要望

- ・『ARCHITECT』を会社のPR用に活用できると良いと思う。例えば賛助会の商品を採用して完成した建築事例の紹介などをさせていただくと、掲載号をPR用に配布するなど、協力会のメリットに直結できるのではないかな。
- ・『ARCHITECT』へのチラシの折込は、DMと同様に機能しており、回数を減らしてでも継続してほしい。

○広告費について(愛知地域会は広告掲載の度に個別で広告費を納めていただいています。静岡・岐阜・三重地域会は一括徴収される協力会費の中から広告費が納められています)

- ・広告費は一括徴収される協力会費から捻出しているため、際立って負担を感じているということはない。
- ・広告協力予算は会社としてこれ以上の負担はできない。
- ・新しい項目での金銭協力については会社の稟議が通らないが、既存項目の増額なら可能。
- ・通年JIAからはいろいろな協力要請があるが、事前に予算を確保できれば会社としては問題ない。しかし、一度なくなったものを復活するのは難しい。

○発行形態に関する意見

『ARCHITECT』が正会員とのつながりのツールであることは確かだが、紙媒体である必要はなく、メルマガなどでも良いのではないかな。メルマガになった場合はバナー広告などのPR手段がある。

- ・メルマガだと紙媒体に比べて読まないし、すぐ削除されるので、広告を出している以上、紙媒体で続けてほしい。
- ・紙もネットもそれぞれ一長一短あるが、社会的にはネットのほうが優勢である。製品カタログの場合、WEBカタログのほうが評判が良い。
- ・毎月発行である必要はない。広告掲載の回数が減るので会社としても負担が減る。
- ・いずれ紙はなくなるだろうが、会員の年齢構成をみるとしばらくは紙媒体でいくと思う。他団体でも紙媒体はなくなりつつある。『ARCHITECT』がなくなっても他のPR手段があるので問題はない。
- ・『ARCHITECT』がなくなるのはさみしい。発行回数を減らすなど、現状の予算でできることを考え、継続してほしい。

6. 他支部からの意見

- ・『ARCHITECT』の理事会レポートは、記録として大変参考になっている。
- ・事業を行うことに終始して、事業報告などのまとめがなかなかできていないため、活動の記録を残す媒体があることは大変羨ましい。
- ・メルマガの配信は行っているが、冊子で毎月発行の会報誌があることはすごいと思う。会報誌をつくる意思はあっても編集を行う体制がつかれない。大変だと思うがぜひ継続していただきたい。

7. 『ARCHITECT』送付先からの意見

また、今回は各会員以外にも、『ARCHITECT』を毎月送付している本部他支部や東海四県の主要な行政庁、図書館、学校など約130カ所にアンケートを実施しています。集計の結果は次回ご報告しますが、現時点の回答9通全てで、今後の送付希望に関する質問に「今後も受け取りを希望する」という回答をいただきました。

さらに、保管状況に関しても、「全号保管している」という回答が多く、『ARCHITECT』発行に対して期待を寄せられていることがわかります。

中澤賢一(JIA 愛知) | 会報委員会委員長



継続、休刊、どのような結果になっても、これまで30年続いた
『ARCHITECT』の今後について会員全員で議論しましょう!!

(次回連載は「7. 『ARCHITECT』継続・休刊に関するアンケートの集計結果」の予定です)

同封の「東海支部会報誌『ARCHITECT』継続・休刊に関するアンケート」にぜひご回答ください!!

返送先: JIA 東海支部事務局 FAX: 052-251-8495 / メール: shibu@jia-tokai.org



鈴木 俊之 (JIA 静岡)

石井建築事務所 (熱海市田原本町9-1熱海第一ビル405 TEL 0557-82-4171 FAX 557-82-4174)

美しい自然に心洗われるトレッキングのたのしみ

ふとしたきっかけで 2007 年に初めての富士山登頂を経験しました。富士山頂上浅間大社奥宮のお参り、剣ヶ峰からの雲海、お鉢巡りと初の日帰り富士登山で奇跡的にすべての体験を一度にしてみました。

昨年で富士登山 13 回を数えました。運良く、美しい御来光を三度見ることができました。また、2014 年に屋久島、2015 年に熊野古道にも行ってきました。神秘的な屋久島の森、熊野の神道は、いずれも大自然の力強さを感じました。最近は日帰りで楽しめる近場のトレッキングをしています。

三つ峠山、大菩薩峠、カチカチ山、八丁池、金時山、上高地、入笠山、石割山、釈迦ヶ岳、大山、越前岳、八ヶ岳高見石…etc

すべての山から沢山の感動をいただきました。

トレッキングは、元気な身体、満たされた精神を手に入れることができます。自然の山を歩きながら一本一本が異なる木々や、苔、透き通った水、そして美味しい空気。健康になります。

これからも、この美しい日本の自然を体感し続けたいと思っています。

そしてわが社も、「美しい日本とは何か」を常に思いつくり続けます。



「富士山剣ヶ峰」の碑前 (2007 年)



今年登った八ヶ岳 (長野県) 高見石での一枚

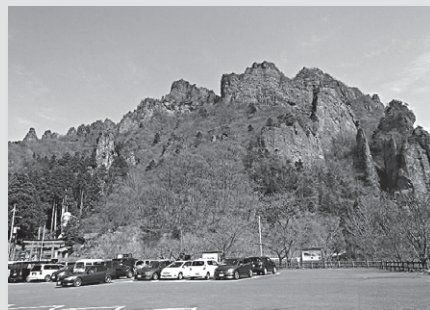
わたしのとっておき ⑦ 年末年始の恒例行事・ 妙義神社



大橋康孝

JIA 静岡
高橋茂弥建築設計
事務所

毎年、年末年始は妻の実家のある群馬県安中市で過ごすようにしています。恒例の行事は、年が変わってすぐに家族皆で挨拶をし、車で 30 分ほどかけて妙義神社に出かけることです。妙義神社は、妙義山を信仰する神社で、創建 537 年、本殿は国の重要文化財に指定されています。妙義山は溶岩でできた岩峰の尖った山容をしており、日本三大奇景、日本百景にも選定されています。私は妙義山と荒船山、そして浅間山を遠方から眺めるのが好きで群馬に行く楽しみとなっています。神社は本殿と波己曾社殿それと唐門、総門が主な建造物できらびやかに装飾された意匠が特徴的です。2007 年の台風で本殿に被害があり 5 年間ほど修復工事をしていました。由緒正しき神社ですが、初詣でもそれほど人はおらず人混みの中を歩いたりしないで良いので穴場です。樹齢 100 年以上の樹木の間を本殿まで続く階段は見上げるほどの高さがあるので、毎年何歳まで上れるだろうと思いながら息を切らして上ります。本殿に着くと、御祈禱をお願いし順番待ちするのですが、拝殿の所に炬燵が置いてあり、白い息を吐きながら炬燵で少しの休憩をとります。こじんまりとした拝殿であるため、一家族か二家族ごとに祈禱をしてくれます。順番が来て正座



妙義山



妙義神社

し座っていると、ドーンドーンという始りの太鼓の音と冷気によって頭から今年のことがリセットされクリアになってくるのを実感します。少人数での祈禱のため、これでもかというくらい、自分たちの家族のことを口上してくれるので感謝の気持ちで一杯になります。帰りには周りの山並みやまち並みと星空の夜景が絶景でそこでも感動して、さあ今年も頑張るか、と活力をもらって帰ってきます。群馬に行く際にはぜひお立ち寄り下さい。

私の生き方 蝦蟇に教えをうけ、野の花に理想の建築をみる 松村正恒 - No.18/90.3月号掲載 -

今回の再録は、90年3月号に掲載された、建築家 松村正恒氏(当時77歳、JIA会員)の論考です。出典は「JIA四国NEWS 1989年7月号」。支部の垣根を越え、『ARCHITECT』に掲載されました。八幡浜市立日土小学校を設計した松村氏が、独特の文体により綴る半生を振り返る随筆には、当時の建築界およびJIAに対しての強いメッセージが込められています。(紙幅の都合により、本文は抜粋での掲載ですが、全文を東海支部HPにてpdf形式でご覧いただけます。ぜひご一読ください)

私は大洲中学で中江藤樹の学を叩きこまれた者の一人。藤樹学の骨子は、至良知、知行合一。

人はこの世に生をうけ、いつかは死す。その間に憂いの絶えることはない。人間は体内にあるときすでに、それぞれの定め、性をそなえている。逆らうことはできない。天命であり運命である。生まれながらに、教育され、経験しなくとも、知る、行なう能力、すなわち知能と徳を心と身体に持つ、これが人間の本性。この良知良能を磨き、物の道理をわきまえ、天から命じられた務めを果たさなければならぬ。徳を身につけ人格をそなえること。

心を外に向けるからいけないのだ。人間は平等には生まれていない。しかし、等しいことがひとつある。生まれながらに純真な心を持つ、このことを反省し、心を内に向けよ。そうすれば、人を羨むこともない、分際に応じて満足する、これを知足と言う。傲慢にならず、名声、慾に目もくれず、怠けない。そのときに人は憂いを去り心やすらかにして幸福感にひたる。さらに、己を幸せと思ったら、他人を幸せにする寛大な心と親切な行為、易しいようでむづかしいことだが、このとき人は無我の境地、良知良能を体得し、美しく静かな魂の持ち主となる。

空間、時間を超越して至善の道を歩むことができる。幸福は人格である、といわれる所以。心が定まって変わることなき正しい心、これを恒心、人にたとえれば松村正恒。恒心あれど恒産なきが玉に瑕。

藤樹曰く、お前は形ある物に目がくらんでいる。実をとることばかり考える。虚を埋めることを知らぬ。言に物あり、行に格あり。お前の行為は間違っている。形のない物、目に見えないものの価値に目ざめよ。お前は闇でも目が見えるようだが、闇の世界から足を洗え。日の当たる場所へ出ろ。人目をはばかりすることばかり考えないで、目立つような存在になれ。無から有を生ず、お前の職業を虚業家という。世にいう建築家と同列だ。人のものを盗んで、お茶をにごす、三十分どころか五分の理屈をこねる。あんな真似だけは止せ。これまでの経験を生かし、知恵をしぼれ。失敗を恐れるな。稚拙と言われようと人の魂の深奥にせまれ。

中学生の頃、蛙の解剖があり、人なみに青蛙を用意していたが、出がけに蝦蟇と目が合う、縄でしばる。蛇に身体半分のみこまれても諦めない、麻酔の断末魔に涙ながらに蝦蟇が言う。君のおかげで汽車にも乗れた、商店街も見物した、虚栄に身をやつす人間のあわれさも。君に会わなかったら、ワシは一生を藪の中で終わったであろう、恨むどころか感謝している。最後に一言書いてくれ、もう駄

目だ、などと弱音を吐くな、我慢せよ、粘れ、頑張れ。

蝦蟇の言うこと、間違いあるまい、遺言を守ろう、と固く心に誓ったのが禍いのもと、蝦蟇が息を引き取った瞬間、蝦蟇の精が私に乗り移る。歩いても、のそり、のそりと進歩が遅い。長い物に巻かれる、呑みこまれる、無口で、目立つ存在ではない、蔭にうずくまって世間をにらんでいる。人間は平等ではない、悟ったつもりでも、山本忠司先生は総身に知恵が廻るのに、私は知恵の泉も枯れはてた。無理に絞れば油汗、万事につけ三段跳びの山本先生に比べて私は、跳ぶどころか引きさがらばかり。

18才の晩秋であった。月にかかる叢雲晴れるが如く豁然と悟る。学歴とか肩書などに目もくれず、一人の人間として世に処していこうと。

その手始めに名も無き学校にもぐりこむ。竹内芳太郎、蔵田周忠先生に出会い、両先生を通じて今和次郎先生の知遇を得る。私の一生、生き方は、それで決まる。後悔みじんもなし。

ある日、蔵田先生を訪ねる。当時、最もモダンな建築家であり、ダンディな生活信条を守っておられた土浦亀城先生が事務所を開設、蔵田先生の言われるままに入所、月給きまらぬドラフトマン、サンドイッチマンより悲しからずと。建築家の一人立ちは40才、アーキテクト土浦で、やっと世界に認められる、と畏れながら事務所のドアに、小さい文字板を貼られる。

招かれざる客が入ってきて、骨相を見てやろう、見料の心配はするな、と頭をなでてから言う。お前は太物になれる器ではない、大きい仕事のリーダーにはなれない。ただし救いはある。パトロンが次から次と現れて困ることは、まずない。帰りぎわに、お前、この仕事続ける気か、と気の毒そうに尋ねる。まあ、今のところは、止めとけ、今なら遅くはない、出直せ、悪いことは言わぬから、と親切に言い残す。建築家がお前に適した職業とは言わなかった。あの日から今日まで、挫折のたびに、骨相見が教えてくれた職業に変わっておけば良かった、と幾たび思い悩むことか。

建築家に不向きな自分に愛想がつきと、世にいう建築家という人種も好まない。大勢集まって、家・家という烏合の衆と間違えられる、と旧家協会大会で臆せず言う。烏合の衆は周が正解、山の中に集まった鳥は円陣を張る。黙ったまま時を過ごす。一羽がカーと口を切る、寡、衆寡敵せずの意味らしい。長い間をおいて、カー、過ぎたるは及ばざるが如し。また沈黙。カー、可もなし、不可もなし、カーカー可決成立。カー協会誕生的一幕。



によりかけ自慢の種にしているものではない。校庭に大木がそびえていた、入ることを禁じられていた密室があった、それだけで、私も同感、幸せに思う。

30年を経過した日土小で感じたこと。もともと山間で日差しは弱い。教室にただよう気配が、しっかりと落ちついて、あたたかい深味を加えていることに。堰き止められた川の面を、小魚のはねる音が無言を破る。雨樋の水は高い

私の卒業設計は、子どもの家。その内は乳児、幼児の託児所、共稼ぎ家庭の学童を放課後預かる。母の病氣、入獄(それも不思議でない時代であった)に際しては、夜間も長期にわたっても預かる。家庭の延長のような、気やすい子どもたちの家。

児童問題、と当時はいった。教育、心理、遺伝、衛生などに関する出版物、雑誌類に目を通し、研究所を訪ね、施設を腰すえて見学、あらゆる機会を利用した。寝食を忘れた、といっても恥じないつもり。川添登氏と知り合えたのもこの縁あつてのこと。

ここで少し建築の話を。モニュメントを創ることには、才能もなし関心もない。ひたすら念じたことは、こうである。

人の通ること稀な山奥の日陰に、つつましくも咲く名も知れぬ一輪の花。通りかかった旅の人、もよおした小水に、ふと見下ろせば小さな花、はなはだ失礼と、つくづく眺めれば、清純な香り素朴な色、心にしみて立ち去りがたい、そんな建築を造りたい。ところが、私の小さいこの願いが叶えられた、半世紀たってから。聞きつたえ、涙ながして喜んでくれたのが、親愛なる蝦蟇である。そして言う、よく今日まで我慢した、だが、決して自慢はするな、宣伝するなど下衆の仕業、真物ならば口づてに知れわたる、蝦蟇の油が何よりの証拠。

有名になった盈進学園高校、理事の細井栄氏が学校建設にあたり、日本で名の聞こえた学校を見て廻られた。目をみはるようなおぼした物、見せ場に事かない、これでもか、これでもかと押しつけがましい建築。金をかけ贅をつくした学校。どれも胸に訴えるものがない。思いあまって訪ねたのが四国の果て、日土小。やっと、学校らしい学校に辿り着いた。なんの変哲もない、てらにもなければ見せ場もない。冬眠から目ざめた蝦蟇のように、ぼやけて、おまけに泥くさい、簡素きまる。だが待てよ、見するには忍びない。自然、わざとらしさが無い、不均斉。内に入ってみよう、ペイント塗では木肌も木目も艶消しだ、だが、教室にただよう気配が心にしみる、静寂、枯高の醸し出す、えにいわれぬ味がある。ほのぼのと伝わる気品がある。自分が探し求めていた学校に、やっとと巡り逢えた、細井先生の述懐である。

森毅教授が言われた。思い出に残る学校、それは、建築家が腕

い所から川にまっすぐ。落口に巻きつけた棕櫚のせいで、春雨には、シュロシュロと、豪雨ともなればシュラシュツシュツ。

蜜柑の花が咲く頃は、五月の薫風に乗って清純な香りが教室に漂う。秋には山に、蜜柑と柿の朱が映える。冬ふかまれば沈んだ落ち葉で、澄みきった川の底が絵に変わる。すべてが天のなせる業。

オープンスクールが主流らしい。管理社会と技術優先の落とし子に思えてならぬ。伸ばしてやるべきは、個性ではない、創造力である。自分で工夫し、起きあがる力を養ってやること。教師が自分の持つ能力を思う存分に発揮できる場を造ってあげる、これが建築家にできる仕事、ただそれだけの話。

生涯教育を事あたらしく叫ぶ。空々しい。私には50年前の仕事であった。新谷中学校で狩江小学校で、山奥の学校で、すべて実験済み。何事も、箱だけ造っても始まらぬ。とかく浮世は箱師が多すぎる。籠抜けのほうが、いかほど罪が浅いやら。

文部省は頼りない、閥部省に改名せよと私が言う。木造校舎と騒ぐほどのこともない。この場合も、肝心なのは、形ではない、心だ。

私にとって木造の鑑は安芸の宮島。変幻自在、天衣無縫、人間の賢い遊びの跡もない。四季おりおりの祭には、神と人とが心をひとつに宙に舞う。無数の燈火が波間に揺れる。火の消えた後の淋しさも、ここにはない。

終わりに。常磐津の人間国宝、その横に名人、さらに玄人と並び演ずる。私ごとき素人にも、違いが歴然。にじみ出る芸の深み、厚みであらう。円朝が言っている。客が喜ぶからといって慢心してはいけない。自分の本心が、これで良い、と納得するまで芸を磨け。話すのは舌ではない、心で話せ、舌をなくせ。

歌舞伎斬方の人間国宝、田中伝左衛門氏は、蔭の正直。家族も他人も誰もいない所で稽古する。そのときに、気をゆるめるな、姿勢を崩すな、それができていないと、舞台上上がったとき、芸が乱れる。鼓は、手で打つものではない、心で打て。俳優も、名優ともなれば、身体をなくす。

私は常に思う。建築家たるもの、己を殺せ、目立ちたがる、愚の骨頂と心得よ。

テーマ | <帝国>と向きあうわたしの住まい

2018年10月27日(土) TOTO テクニカルセンター名古屋 プレゼンルームにて開催

応募総数 13作品 (一般8、学生5)

●2次審査対象 「失われた空間を求めて」

「解体新所」

「新・みんなの家」

「命のおわり・はじまりの家」

「終わらない自邸改修プロジェクト」

「絶震ノ狭間」

「廃線守の家」

川本純平 (慶応義塾大学理工学部4年)

鈴木遼太 (明治大学理工学部建築学科4年)

大石啓明/宮岡美樹 (東海工業専門学校2年)

斉藤知真 (信州大学大学院総合理工学研究科 M1)

新開夏織/奥野智士 (関西大学大学院 M1 /フリーランス)

柴田樹人/山岡恭大 (名古屋大学大学院 M1)

五十川泰規/藤城太一 (IAMAS [情報科学芸術大学院大学] M1 /フリーランス)

●審査員 (順不同・敬称略) <○: 審査員長 ◎: ゲスト審査員>

○佐々木敏彦 (大久手計画工房)、◎家成俊勝 (京都造形芸術大学 / dot architects)、黒野有一郎 (建築クロノ)、

駒井貞治 (名古屋芸術大学 / 駒井貞治の事務所)、布村葉子 (大建 met)、森本雅史 (森本建築事務所)

■1次審査を終えて

東海支部が主催する設計競技は、最も伝統ある事業のひとつとして1984年に第1回が開催され、今年で35回目を迎えました。

今年の設計競技のテーマは「<帝国>と向きあうわたしの住まい」です。1次審査は10月27日(土)、大名古屋ビルディングのTOTO テクニカルセンター内プレゼンルームにおいて、審査員長の佐々木敏彦氏、ゲスト審査員の家成俊勝氏をはじめ6名の審査員で行われました。

東海支部設計競技特別委員会では、2014年度の第31回から審査の方法を二段階とし、社会性が高く時事性のある問題をテーマとして設定する方針としました。テーマに社会性、時事性を盛り込むことで、建築の背景にある動機づけを考える場を意識しながら取り組んでいます。

今回の<帝国>というテーマから、応募者が何を<帝国>として位置づけ、どのような住まいをかたちづくるのかが注目されました。応募数は、過年度との比較では少ない結果となりましたが、積極的に応募された学

生や若い建築家が日本全国に存在していることが確認できました。ただし、応募数が年々減少傾向であることは、来年度以降の設計競技特別委員会における検討課題と考えています。

東海支部設計競技は、未来の建築を担う世代からの応募が大半を占め、2次審査では応募者と審査員との公開性ある議論を繰り広げられることが伝統のひとつと言えます。

今年の2次公開審査会・記念講演会は12月8日(土)午後、大名古屋ビルディング12階TOTO テクニカルセンター内プレゼンルームにおいて開催します。若い世代の応募者と審査員の白熱した議論が展開されると思います。皆さま、ぜひ会場へと足をお運び下さい。

間瀬高歩 (JIA愛知) |
地域計画建築研究所・設計競技特別委員会委員長



審査風景



遠藤新、アアルト、吉田五十八の建築を見学

JIA 静岡2018年企画「初秋の葉山・素敵な建築ウォッチング」のチラシを作製しながら、多くの人が参加するだろうと確信していました。案の定、締め切り2週間前には定員より8名オーバーの33名の申し込みがありました。

10月5日の見学は2班に分けて行いました。葉山は1894（明治27）年、御用邸が造営されて以来、皇室ゆかりのまちとして歩むとともに、海の保養地として日本人のみならず諸外国の要人から愛され、別荘建築全盛時代を築いたまちで、今も往時の葉山の文化の密度が窺い知れました。

私たちB班はまずは「ENGAWA」での食事となりました。ここは1934（昭和9）年宮内庁が建設した昭和天皇の侍医頭を務めた塚原伊勢松の別荘でした。現代風に自然体でお洒落に改装したカフェレストランは、日本の木造建築ののんびりとした雰囲気の中、豊かな食事を楽しめました。

ENGAWA 前の細い坂道を登って、1928（昭和3）年に建てられた遠藤新設計の「加地邸」の見学となりました。普段は公開されていませんが、この日のためにJIA静岡の申し出により見学が可能となりました。遠藤新はフランク・ロイド・ライトの弟子として有名な建築家で、「自由学園明日館」「山邑邸」など、ライトが日本において設計にかかわった作品を

実質的に支えてきた人です。「加地邸」は遠藤新が建築から家具、照明器具に至る総合性を実現した作品です。

内外共に敷地の高低差を生かした建物で、木造ではバランスの取りにくい屋根との関係を微妙な高さに変えることでプロポーションのよいクラシックな外観としてまとめていました。さらに大谷石の積み方、各所に異なる軒の出、窓の多様性があり、一つとして手を抜いている箇所のない住宅です。内部においても同じく、数段の階段、部屋ごとに異なる天井の高さと形状、加えて幾何学模様の使い方、詳細な部分での面の取り方、紋様など、遠藤新の建築家としての設計への取り組み姿勢を感じました。

神奈川県近代美術館葉山での「アルヴァ・アアルト-もうひとつの自然」はアアルト生誕120年の本格的な回顧展でした。モダニズムに自然の用を取り入れ、人々の暮らしをより良くする建築や家具、照明などの調度品に至るまでトータルデザインを追求した建築家です。私は多くのラフスケッチから感じるものがありました。決して特別なスケッチではないですが、何度も何度もスタディを重ねてできていく過程がわかりました。当時のアアルトにすれば、数多くの物件があったと思いますが、どれも手を抜かず、手を使って何度も書いていることに、PC に頼りがちな昨今の建築との根本的

な違いを感じました。

最後に訪れたのは山口蓬春記念館です。山口蓬春が1948（昭和23）年から亡くなるまでの住まいで、東京芸術大学の同級生である吉田五十八の設計です。私が一番興味を持ったのは、画室です。天井まである大型の木製窓にもかかわらず、戸の枠が細く、かつ2方向に広がる開口部です。1948年というまだ物資も豊かではなかった時代にこの建築ができたということに驚きでした。

遠藤新、アルヴァ・アアルト、吉田五十八の建築を見学しましたが、どの建築も考え方や納まりは異なり、個々によって好みの違いはあると思います。全てに対して言えることは、それぞれの想い・考え方の軸をしっかりとしながら、詳細な部分までこだわりを持っていることです。既製品や出来上がったCADを多用し、さまざまな作品の情報を本やネットで手に行うことができる時代ではありますが、決して物真似ではなく、自分の目指す建築の本質を見つめ、それに対しての自分なりのスタディを重ねていかなければならないのかもしれない。それぞれに建築家として何を感じたのか問いかけたい気がしたツアーでした。

高島ゆかり（JIA 静岡） |
アトリエ 結



「ENGAWA」での食事



加地邸の外観（設計：遠藤新）



山口蓬春の画室。戸の枠が細く、かつ2方向に広がる開口部（設計：吉田五十八）

建築の考えるを考える

去る9月14日に学生団体NAFの連続レクチャー企画が名古屋工業大学にて行われ、Studio Velocityの栗原氏が登壇した。栗原氏は「愛知産業大学」、「美浜の団地」、「山王の事務所」、3つの近作、現在進めているプロジェクトなどについてレクチャーを行ってくれた。

他人のレクチャーを聞いていてなるほどと相槌を打つことはあれど、聞いた後に建築をつくらなければならないという思いに駆られることはほぼない。しかし、栗原氏のレクチャー

を聞いた後は建築をつくらなければならないという気持ちがどこから湧いてくる。それはなぜなのかと考えてみると、僕たちが見落としてしまっている、もしくは考えることを忘れてしまっている部分を栗原氏は果敢にチャレンジしているからだと思う。

そのチャレンジはどのような部分かという、現在の日本の建築には経験や知見によりつくり上げてきたつくり方の仕組みが存在することで、われわれ設計者は1から10まで建築の設計で考えるわけではなく、3から10くらいを

考えるようになっているケースが多い。しかし、栗原氏のつくる建築を見ていると1から2の部分こそ建築家がつくり上げチャレンジしていくのだという強い意志を感じる。

例えば山王のオフィスでは梁の集成材をヤング係数の分布を調整することでたわみの調整を行っている。言葉にすれば短いものだが、実際の作業は一本ごと

のヤング係数を測定して、集成材としてつくり上げるために計測した材を並べるという気の遠くなるような作業を行っている。これは材料を一から捉えるということだが、それだけではなく、そのたわんだ梁をどのようにジョイントするのかということも考える必要がある。そもそも梁はなるべくたわみが出ないようにするものであるにもかかわらず、たわみがあるものをジョイントするのだから、容易にはできない。材料だけではなく、接合部まで一からつくり上げているわけである。

栗原氏としては材料や接合部にこだわっているのではなく、つくりたい建築をつくるには、現在における日本の建築のつくり方の乗り越え、1からチャレンジしていかなければならない。つまり、建築をつくりたいという栗原氏の強い想いがわれわれに伝染し、建築をつくらなければならないという気持ちを生み出すのだと思う。



レクチャーの様子



中渡瀬拓司 (JIA 愛知) | CO2WORKS

学生の声

9月14日studio velocity 栗原さんのレクチャーを開催していただき、SDレビュー受賞直後という大変お忙しい中ありがとうございました。そしておめでとうございます。受賞作含め数々の作品を詳しくお話していただき、とても興味深い時間でした。

受賞作「山王のオフィス(住宅)」では、目を引く美しいお椀上の屋上写真だけでなく、一目では計り知れない梁などの構造計算、ワイヤーなどの既存の方法に頼らないこだわりの工夫を聴くことができ、授業では知ることのない現場の技術や思考を知れるのはこのレクチャーに参加できることの価値に他なりません。聴いていてとても楽しかったです。ですが、やっぱり形の曲線美は

格好良過ぎるのでぜひ、次号新建築も拝見させていただきます(9月17日現在)。

その他の作品に関しても1つ1つ細やかに話していただき、全体で一番に思ったことが1行目。最初に話して頂いた愛産大の中庭は、元の急激な段差をなだらかにするだけでなく、一律ではつまらないと細やかな起伏を設けたことには「こだわりのあるんだなあ」と思う程度でしたが、美浜町の団地では海の見える高さ。山王のオフィスでは屋上の形。人の活動の場所と周囲の環境の関係の使い方が綺麗で凄いなとどんどん引き込まれ、終盤で現在進行形の富山県の住宅とオフィス。山ができちゃった。住宅とオフィスと研修棟の間にある山は模型写真だけで驚愕のも

のでした。これが住まう人に馴染み、立山連峰とともにまちに馴染み、そうなった時にどう見えるのか、とても楽しみです。

最後の方に、駆け足となってしまいましたが、学生時代のコンペも紹介していただきました。等間隔のドットが人の行動によって壁となっていく細やかな調べ方や、砂の動きが地層のようになる様など、紹介していただいた今の作品達と似通うものを感じ、学生時の考察より良くする努力はずっと引き続いていくのかなと思いました。

まだ未来は知れずさまようばかりですが、地を踏みしめて諦めずに行こうと思います。

西尾菜歩子 | 名城大学3年

「東海地方の気候風土」をこれからの建築にどう活かすか

9月29日に名古屋 TOTO テクニカルセンターにおいて環境セミナーの第1回目(序章)を行いました。なんとか開催できたのも講師の先生方はじめ、住研メンバー他多くの方々のご協力あってのことです。一方で開催に至るまでいろいろなことがありまして、いまだに考えさせられるところがあります。セミナー自体は合計6回あり、まだ始まったばかりのところで締めにかかれようありませんが、住研という団体を運営していくこ



講演の様子。名古屋 TOTO テクニカルセンター

との難しさを経験しました。

セミナーのことをJIA関係者他一般にも告知したのですが、あまりにも参加人数が少なく、開催すべきかどうかの決断を迫られました。臨時に住宅研究会で委員会を開き、さまざまな議論の末、内容について見直しはするもののどうにか開催していこうという方針となりました。全体を2018年開催と2019年開催に分け費用のあり方を見直しました。遠隔地における開催については会場を見直し、多くの方にご参加いただけるよう考えました。パンフレットや広報についても見直すべきところは見直し、人々に内容がわかりやすく伝わるよう変更することとしました。告知後の変更で通達の困難はありましたがやめるわけにもいかない。そんな中で開始直前になっ

て、全て元に戻して延期せよという意見が関係者から出てますます混乱に陥りました。結局その意見は、はねのけちゃいましたけどね。

今回のセミナーで先生方からお話がありましたが、2020年に建築の省エネに関する法律が改められると伝統的な工法が採用できなくなるか、難しくなるようです。それに対する警鐘の意味合いがこのセミナーにはありましたが、先鋭すぎた内容になっているとは思います。濃すぎる内容だったと会場からもご意見いただき考えさせられるものがありました。残り5回、何が大切なのか考えながら進めていきます。

竹中アシュ(JIA愛知) | 竹中設計事務所アシュ



「東海の土はよい」と言われるのはなぜ!?

左官技術の伝統と粋を 現代に生かす術

講師:松木憲司

松木さんには「左官技術の伝統と粋を現代に生かす」という内容でご講演いただきました。お話を伺っていると日本だけでなくイタリアやフランス、ベトナムなど海外でも土壁のお仕事に積極的に携わってらっしゃることがわかりました。ユニークなのは、技術は日本流のそれで行っていても材料については現地のものを使っただけということ。どうやるのだろうかと思いましたが、その場にある素材を組み合わせることで土壁ができていくことがわかり驚きを覚えました。そこにあるもので建築ができるというのは素晴らしいことです。日本の技術を生かすチャンスはこのようなところにもあるのだと気づきました。また、法の改正により土壁をつくるのが困難になっていくことも危惧しておられ、今こそそのような技術に目を向けるべきだと考え

ました。

竹中アシュ(JIA愛知) | 竹中設計事務所アシュ

東海地域の土と地層、 やきもの文化の地理と歴史

講師:石塚晋一

今回の環境セミナーは、環境性能を学ぶというよりも、この地方の環境を知るといふセミナーの様相です。理系ではなく文系のセミナーです。

東海地方は焼き物の産地と言われます。太古からこの地方は良質の土が取れるからに他なりません。現在でも多治見・土岐・可児市で美濃焼の全国シェアは50パーセント程度だそうです。土の種類も蛙目粘土・木節粘土・珪砂とさまざま。蛙目粘土は不純物が少なく焼き目は白。可塑性があり主要な陶磁器の素材とのこと。木節粘土は目が細かく、可塑性も高く炭化木片を含む灰色もしくは褐色で耐火材として利用されるそうです。珪砂は石英のことで

川砂と同意だそうです。あまり聞いたことのない種類でメモするので精一杯。(笑)

東濃地方の地質としては東海層群に類し、土岐口陶土層とのこと。700～300万年前くらいに誕生し、この地域のルーツと言われる東海湖の誕生に近いそうです。この湖があったから良質の土が出るという理論は、この同時期にできたということになれば成立しないかもとのこと。活断層に近いので、良質土が出るのかもしれないというお話もありました。この地域の良質な土はあと7年で枯渇するとか。貴重な資源ですね。女性の使うファンデーションは、実は土の成分なのだそうです。

その後、プラタモリ風にこの地域の陶磁器の発展についてお話いただいて、本当に飽きない楽しい講習でした。



宮坂英司(JIA愛知) | アトリエ創

「環境・エコ・災害対策に向けた各社の取り組みについて」

10月26日、中日パレスにおいて、CPD研修会を開催しました。本研修会では、法人協力会の各企業から「環境・エコ・災害対策に向けた各社の取り組み」を紹介させていただきました。〈講演企業〉大光電機(株)・三協立山(株)〈参加者数〉会員27名、法人協会員 22名

大光電機(株)

住まいの照明設計塾

講師:長谷川 演

住まいの照明設計を、間接照明・外構照明のポイントから説明いただきました。天井を照らす「コーブ照明」では、天井設備を少なくする、「幕板」と使用する器具の高さを揃えるなどで、天井面に柔らかな光を拡散させる手法の説明を受けました。また壁面を照らす「コーニス照明」では、プレーンな備えとする、コーブ照明を90°回転した納まりにするなどで、室内を美しく

表現できるそうです。

外構照明では、夜間の「庭の景色を取組む」「庭を彩る」の2点に絞って説明を受けました。夜間のガラスの映り込みは、調光器と照明器具の選定でクリアすることや、室内から眺める庭を設ける際は、建物側の高所よりスポットライトで演出するのがおすすめだということです。

三協立山(株)

防火設備の運用変更について

講師:久保田喜紀

2019年4月より、ビル用アルミ製建具の防火設備に関しては、「通則的運用に基づく認定品」⇒「大臣認定防火設備(個別認定)」になります。個別認定への置き換えスケジュール、個別認定品の連窓・段窓、設計の参考納まりなど、変更後の留意点について説明いただきました。個別認定品では、窓の種類、WH寸法(製作範囲)、ガラスの種類、段窓の組み合わせ、

それぞれに制限があり、設計者は注意が必要です。連窓に関しては、2018(平成30)年国住指第4608号に基づいた防火設備連結材で対応します。通則的認定品ではOKでしたが、個別認定品ではNGな事例をQ&A形式で紹介いただきました。

今後の課題として、対応できる窓の種類とガラスの種類の拡大、製作範囲の拡大があります。参加の会員からも活発な質問・要望があり関心度の高い内容でした。

法人協力会として、今後もCPD研修を開催しますので、会員・法人協会の皆さま、ご支援・ご協力をいただきますようお願いいたします。

酒井良和(愛知法人協会員) |
LIXIL 中部支社



地域・創生 防災は活動の入口

10月12日、JIA本部元理事で神奈川地域会長、和歌山災害対策委員長を歴任された森岡茂夫氏の講演会が開催された。森岡氏は、2004年にJIA本部に災害対策委員会を立ち上げ、以後10年間で8回、震度6弱以上の地震発生時に支援活動を行うなどの災害対策に取り組んできた。2013年に和歌山へUターンした後、その経験を生かした防災活動をまちづくりの入口にしようと思い「4Action Plan」と名付けた下記の4つの災害対策活動を実践したという。

1. 南海トラフ巨大地震の津波を想定した

「逃げ地図」づくり

沿岸の住民が障害者の歩行速度で、3分間で逃げることができる高台への逃げ道を提示した。

2. 大地震に備えた「耐震改修」の推進

行政が補助する耐震改修が進んでいない中、各家庭が導入しやすい耐震ベッドに助成金を出す方が効果的であることを行政に進言した。また、耐震建具や感震ブレーカーの提案なども行った。

3. 地域材を利用した「木造仮設住宅」の提案

JIA、建築士会、事務所協会が協力して地元で豊富に供給できる紀州材を使った仮設住宅を提案した。

4. 災害時に自治体との協力関係を盛り込んだ「支援協定」の締結

和歌山県下30のすべての自治体と結んだ。それぞれの自治体にJIAを認知してもらい信頼してもらうことができた。

以上、どれも地域の特性や現場の実情に即した活動であり、10年以上に渡り各地で被災

地の実態を体験してきた森岡氏ならではの提案だと思う。また、このAction Planは、同じ紀伊半島の太平洋沿岸で隣り合っている三重県にとっても大いに参考になる防災プランだと思う。

最後に森岡氏は、「なぜ災害対策に力を入れるのか?」の問いに、「JIAは他の団体と違い全国規模で活動ができる。先輩達が50年前から防災に力を入れてきたお蔭でJIAには災害対策の経験とノウハウが蓄積している。地域会レベルで防災活動を推進することで住民や行政からの信頼を得ることが大切」と締めくくられた。

村林 桂 (JIA三重) |
村林桂建築設計事務所



一軒の家から

2018年度のメイン事業である「JIAの窓」講演会が10月13日土曜日午後3時から4時半まで岐阜市民会館で開催されました。建築家の手嶋保氏をお迎えし、「一軒の家から」をテーマに語っていただきました。

遠く京都、浜松、愛知、三重県からの学生の参加もあり、会員以外の多くの若い参加者に来場いただきました。JIA岐阜の会員6名と法人協力会員3名の協力をいただき総勢38名、久々に活気のある事業となりました。

JIA岐阜の山田地域会長からの挨拶として、「JIAの窓」の開催意義と建築への思い、事業を通してともに高めあえたらと、JIA事業への参加と入会の呼び掛けが行われ、続いて手嶋先生の講演に入りました。

冒頭、「ものづくりの自信がない」、「人に評価されることが苦手」、「建て主に喜んでいただけるのが一番」と話されたあと、日常を離れて海外旅行で感じたことを披露されました。空調はなくても日差しをよけ、快適な空間を確保していたインドのアグラ城、日差しをよけ風を取り込んだジャイカプール、懐を小さく見せるため(?)床の梁と床板を同面に納めた儒教のお寺、イタリアのカルロ・スカルパの同じことをやらないディテール、職人がやられているのではなく、一緒に楽しんでいるかのようなプリオン家墓地など印象的な建築を紹介

していただきました。続いて自身の住宅作品についても紹介していただきました。

○伊部の家

備前焼の陶芸家の家で1階が工房、2～3階が住宅になっている。外観は派手でなくアメリカ開拓時代の小屋をイメージしたもので、屋根からの光を採り入れている。内部の壁はコンクリート洗い出しとし備前焼のラフな風合いをイメージしている。

○大磯の家

シンプルな切妻の屋根の家で、外壁は木仕上げであるが、塗装はしていない(木に塗装は必ずしもいらない。塗装しない木はきれい)。

スペースを無駄なく活用するつくりになっている。収納は部屋を成立させるためのもので、小屋裏のスペースを利用した寝室のボールト天井などもそうした理念のもとつくられている。「家は貨物船と思え」というセリフが印象的だった。

○牟礼の家

ローコスト住宅。内部建具のない6階建てスキップフロアの家で外壁はラワンベニヤ張りとしている(悪くなったら張替えればよい)。腰高さを船べりの高さにした畳敷きの和室が設えられている。安い材料を多用しながらも重厚なつくりに見せている。例えばスチールの黒皮塗装(塗装しないのが最良である)な

どもそのひとつだ。家を通りにひらくことによりまちにいろどりと与えるとともに、防犯上も効果がある。

○三秋ホール

木材会社のショールーム兼ミーティングルームで、伊予の山並みを一望できる開放的な広縁と2.5間梁の2-Lアングルによるハイブリットトラスが印象的。アングルのスリットから空気が流れるよう巧妙に仕掛けられている。

このほか、シンプルなワンルーム空間の住宅で、内側のガラス戸と外側の網戸に囲まれた広縁が印象的な「勝田の家」。都市住宅でラワンベニヤとコンクリート打ち放し仕上げで、落ち着きと温もりのある「桜台の家」、24mの旗竿状の敷地で緑道の奥に建つ「本鶴沼の家」、名古屋市の傾斜のある敷地に建つ「1枚の平らな床とそれを覆う屋根」で構成された「藤巻町の家」などを紹介いただきました。作品紹介の後、家具については空間をじゃましないで馴染むこと、設計の基本的な考え方は「ものづくりの基本は空間づくり」と締め括られました。講演を通して印象に残った点は、ラワン合板などの安い材料でも工夫次第で重厚な空間をつくりだせるということや、無駄な空間をつくらないこと、繊細で空間に馴染む手摺や天井ボーダーなど細部にわたりつくり込まれたディテールと障子による落ち着きのある空間などです。手嶋先生の空間づくりへの情熱と真摯な考え方に感銘するとともに、この姿勢を今後の設計に生かしたいと思います。こうして90分の講演会を終了し、駅前に場所を移し先生を囲んで懇親会を行い、膝を交えて建築論議に花を咲かせました。



学生の参加も多く、活気ある講演会となった



大瀧繁巳 (JIA 岐阜) |
金華建築事務所

重要な協議事項にもっと議論の時間を！

今年度より始まった会長セミナーという勉強会が午前中にあり、引き続き午後から理事会で、途中休憩はあるものの長丁場となる。そのため会議は夕方5時頃には終わります。従って、審議・報告に時間を取られて、議論が先送りになることが若干懸念される理事会でした。

本部理事 石田 壽



【審議事項】

1.入退会承認の件

- ・新規入会希望:正会員8名、準会員:専門1名、ジュニア1名、学生1名、協力会員:法人4件
退会希望:正会員3名、協力会員:法人4件 →承認
- ・本日承認後の正会員数は3,692名。久々に減少が止まり微増となった。

2.職能・資格制度委員会委員委嘱承認の件

- ・委員長就任:内野輝明(四国) →承認

3.日本建築学会との「平常時及び災害時における歴史的建造物の調査」及び情報共有等に関する協定書更新の承認の件

- ・本協定は、両会が連携協力し歴史的建造物の保全・活用を推進するために締結する。 →承認

【協議事項】

1.本部委員会体制見直しについて

- ・教育表彰委員会の再編(教育委員会と表彰委員会を分ける)、(仮称)「JIAスクール」を冠としたブランディング、その他を検討し、2019年度より実施したいとのこと。
- ・全国学生コンクールを本部事業に入れ、位置付けを明確にするとあるが、審査基準・事業費も含め各支部卒コンとの関係を議論すべきではないか。東海支部では支部長経験者に意見を聞いている。
- ・フェロウシップ委員会の位置付け(教育事業委員会に再編)等、まだまだ議論することが必要であるが、時間の関係で持ち越しとなる。

2.財務委員会からの財務分析報告と検討について

- ・前回理事会(8/29)の「本部支部財務検討資料」を元に各支部で検討した意見を各支部長、理事より報告した。「今後の体制に望むこと」と「他支部への質問または評価」の2点に絞ったが、やはり時間の関係で説明までとなり、中々議論までは入りきれなかった。次回以降議論する必要がある。
- ・主な意見としては、「会員減少が続く中、抜本的なJIAのこれからの姿・方針を示す必要がある」、「本部:支部の比率の見直し」、「支部運営費配分額の不公平感」、「経費節減のため全国大会開催年の見直し」、「地域が活動の主体であるなら本部役割の縮小削減」等であった。
- ・会員減少に拍車をかけることにもなると、会費値上げには反対の支部が多く見られた。東海支部は支部会費を徴収していないからか、会

費値上げの意見が出ている。

【報告事項】

1.ARCASIA 東京大会報告

- ・参加者数854名(外国人647名、日本人207名)
- ・「ARCASIA 建築賞2018」では、応募総数405件(日本から44件)でビルディングオブザイヤーにはタイの若手建築家が選ばれた。日本からは3名の建築家が入選。

2.JIA 建築家大会2018東京報告

- ・大会登録者数831名。
- ・「大井町駅前パブリックスペース設計コンペ」は、実績を問わない設計者選定で、JIAが最初から完成まで支援し良質な公共建築を目指すということで評価される。

3.会員規程(シニア会員)について

- ・正会員で20年以上継続して会員資格を有していたが、現在正会員でない者がシニア会員として入会できるか? 会員規程の内容からOKであるとのこと、次回総務委員会にて決定し各支部へ周知する。

4.JIA 若手勧誘パンフレットの配布・使用方法について

- ・今後の使用方法について、各支部の広報委員長にアンケートを実施する。

5.民法(債務関係)改正に伴う契約約款改正検討作業中間報告

- ・民法改正が2020年4月1日に施行されることに伴い、工事請負契約約款及び建築設計・監理業務委託契約約款の改正を検討中。

6.活動及び業務執行状況報告

- ①建築士法改正要望等について
- ②建築士資格に係る実務経験検討会について
- ③業務報酬基準(告示15号)改正について
- ④CM方式(ビュア型)の制度的枠組みに関する検討会について
- ⑤ホテルノリアフリー検討会について
- ⑥2019年度役員候補者選挙告示について
- ⑦フレッシュマンセミナー募集について
- ⑧後援名義承認の報告(会長専決事項)

以上が報告された。②では、H20年士法改正による実務経験の見直しは、建築士試験の受験者数の急減の一因であり、対象実務の考え方の見直しを行う。「建築物を調査・評価するような業務」を実務経験に加えることなどを検討。JIAとしては、実務経験のあり方を曖昧にするのではなく、ある程度限定的にしたいと要望している。⑥では、東海支部は1名(石田が改選)役員候補者を選出。11月30日立候補締め切り。⑦では、近畿支部が主催で大阪にて開催される。近畿支部長より各支部2名の参加要請がある。

以上が審議・報告され理事会は閉会となった。冒頭に記したように、重要な協議事項の議論の時間が少ないことが問題ではあります。

東海支部役員会報告

10月19日に支部役員会が開催された。今回は近畿支部との交流会もあり、1時間の会議で高速審議となった。矢田支部長体制になり新たな取り組みが近頃見えてきた。

1つ目は豊田三重地域会長が牽引する三重県との協定づくり。防災から始まる信頼関係から広がる提携に期待したい。

2つ目は会報誌『ARCHITECT』の今後を通して伝えることと会員サービスとはなにかなど多くの議論を起こすであろう。

3つ目は外へつながる取り組み。近畿支部との交流会など、支部への内向きでなく外へ広がる企画が動き出している。

『ARCHITECT』の今後の議論や広がる活動に注目していきたい。

次に本部報告にあった民法改正は気になる。役員会では時間の関係で詳細は報告されていないが、法務省のHPによると、民法のうち債権関係の規定(契約等)は1896(明治29)年に制定されて以降約120年間ほとんど改正されていない。今回の改正は2020(平成32)年4月1日から施行される。特に注視すべき点は請負に関する見直し。中でも担保責任の整理は我々の仕事に直結してくる事項で今後の情報を待ちたい。

支部役員会の内容は右記を読んでもいただければいいが、最近の支部活動について書いてほしいと依頼されたので、前段の活動と併せて感じていることを掲載したと思う。

どの職能団体も会員減少や縮小する社会に苦慮し、会員増大のための議論はあちこちから聞こえてくる。しかし、減少を止めることが、難しいことは皆気づいていると思う。そんな中で、市民へ建築家の職能や職域を認知してもらい、会員へはどのように還元していくのかを考えるために支部や地域会はあるのだと思う。そんな、当たり前のテーマを出発点に、支部役員会は「決定する場」から「議論する場」になればいいと思う。議論には新たなお題が必要で、それは各委員会が企画立案を持って、「やりたい」という気持ちで企てることが重要。そのために支部は活動方針を分かりやすいメッセージとして発信しなくてはいいけない。

今の支部活動は前段の3つの活動からみても、外と内への発信がバランスよくなされていると感じる。近畿支部長の言葉を借りると、「企画は広がらなくてはいけない」。その通りだと思える。縮小していくのであれば、外へ広がる企画をもって、会員外の人たちとできる活動をしてゆくべきではないだろうか。そのためには、例えば防災などの活動は市民や行政との信頼関係を構築しやすく、ボランティア精神から役割を広げ、建築家の職能や職域を理解していただけたらと思う。

また、『ARCHITECT』の議論は、会報誌の役割だけでなく、会員サービスのあり方や、活動のアーカイブ、さらに議論の場としての紙面など媒体の役割とJIAの役割を同時に考えられる、いい機会だと思う。

企画・活動がルーティンでなく「おもしろい」「やりたい」となれば、運営や運用の役割が小さく感じる。また、面倒な運用は簡素化できれば負担も減ると思う。



浅井裕雄 (JIA 愛知) | 裕建築計画

1. 審議事項

①入会申込 正会員「東福大輔(愛知)」(矢田)

→愛知地域会が面談後承認予定です

②「第20回まちとすまいの集い 現代中国の建築・都市 シンポジウム」(12/15)

後援名義使用許可について【メール審議報告】(澤村) →承認

③アーキテクト新年広告について(澤村) →承認

2. 協議事項

①支部災害対策委員会 講演会の企画について(杉山)

講演会を来年2月に予定。被災地のその後、神戸などでも孤独死やコミュニティのことを検討している。次回役員会で企画書を提出予定。

②本部理事改選について(矢田)

石田理事が退任になる。ローテーションを確認し、まず次期支部長候補を決めて、次期理事を決めていく。ローテーションでは次回の支部長は静岡地域会から選出。11月の支部役員会で次期理事を決めたい。理事は愛知から選出する。

③財務に関するアンケート(矢田)

東海支部からは3件の意見がありました。近畿支部は5ページの長い意見書あり。東海からは正会員の会費値上げは良いのではという意見など。今後も意見交換できるので積極的に意見を上げてほしい。

④「2018JIAフレッシュマンセミナー大阪」について(矢田)

各支部から2名は推薦したい。静岡、岐阜はなし、愛知は3名から4名推薦したい。次回地域会で決定する。

③国交省「今後のホテル又は旅館におけるバリアフリー化の取り組みに関する推進」について(澤村)

・車椅子室の設置基準が変わります。来年政令改正。

・補足 設計マニュアルをつくる予定。

④「JIA 建築家大会2019青森」開催日程について(矢田)

・2019年10月17日から19日まで。

・美術館が竣工。見学会もあり。

・実施コンペも開催予定 東北支部から弘前市役所と協議。

3. 監査意見

・支部長の人選について 整理してわかりやすくルール化しておいてください。



街道からの全景



1階は寄付、次の間、座敷とつながる



2階数寄屋の座敷



■紹介者コメント

細久手宿は中山道で江戸から48番目、京から22番目に位置する宿場で、中山道の開設当初、東の大湫宿から西の御嵩宿までの道程が四里半(約17.7km)もあったことから、尾張藩によって設置された。慶長11(1606)年の開宿当初は、七軒屋と呼ばれる小さな仮宿で、その後放火により全焼し、慶長15年に正規の宿場として再整備された。宿場の規模は、天保14(1843)年の記録に「町並み三町四十五間(約410m)、家数六十五軒、旅籠屋二十四軒、総人数二百五十六人」の記録がある。1802年、1813年、1858年の三度の大火に見舞われたが、現在の町並みは安政の大火(1858年)以降に形成された弓型(曲がり)の

形態の宿場である。

その中で安政6(1859)年築の尾州家定本陣大黒屋のみが当時の姿で現存している。大黒屋は、細久手宿の本陣・脇本陣が手狭になり、他領主との合宿を嫌った尾州家が、問屋役酒井吉右衛門宅を尾州家本陣として定めた。軒庖付切妻造瓦葺きの2階建て、桁行7間、梁間9間、屋根の両端に卯建を上げ、正面外壁は腰下見板の上を黒漆喰塗としている。1階の寄り付き、次の間から続く奥座敷は大床で付書院上部の雲形板や斜めに向いた地袋など意匠性の高い設えとしている。2階の奥座敷は丸柱の床柱に半丸の長押、欄間に蝙蝠の彫り物、障子腰板に松が描かれるなど数寄屋の造りである。大黒屋は明治3

(1870)年に一旦廃業したが、昭和26(1951)年に付近の亜炭鉱による賑わいを契機に再開し、現在も16代目当主が料理旅館を営んでいる。近年1階物置をギャラリーとして街道歩きの人たちに開放している。

所在地：岐阜県瑞浪市日吉町7905-1

建設年：安政6(1859)年

規模構造：木造瓦葺き2階建て

文化財指定等：大黒屋旅館主屋 登録有形文化財

第21-0109号

登録年月日：平成19年5月15日

野々川光昭(JIA愛知) |
オウ環境設計事務所



データ発掘 (お気に入りの歴史的環境調査)

忠節用水分水樋門(ロボット水門)

■発掘者のコメント

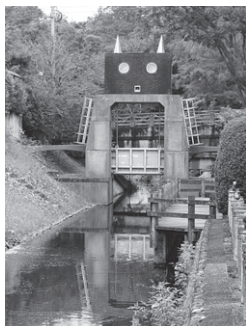
岐阜城天守がそびえる金華山のと、岐阜公園の北端部に面白い構造物がある。

正式名称は「忠節用水分水樋門」。長良川の水を岐阜市内に送る「忠節用水」の水量調節のため、一部を長良川に戻す分岐水路の入り口に、スルースゲート式水門(上下式水門)として昭和7(1932)年につくられた。現在は当初の役割を終え、門は空いたままの状態だ。

外観がロボットの風貌に似ていることから「ロボット水門」と呼ばれている。制御室の窓は二つの丸い目と小さな口に見える。2本の角は1992年の改修でつけられた。門扉開閉の自動化改修工事で、門を上下させるための金属棒が2本屋根の上に飛び出してしまった。その棒を保護するため、ステンレス製の円錐形カバーが取り付けられたいが、設計者の遊び心が感じられ微笑ましい。

この樋門近くの分水路沿いは、昭和63(1988)年に四季折々の植物が楽しめる散歩道として整備され、「湊コミュニティ水路」となっている。

「忠節用水」は『岐阜市史』によると、その存在が確認できる最古の資料は承応2年(1653)の「加納領明細絵図」である。取水口は長い間、四



西面



南面近景



東面

所在地：岐阜市御手洗381

構造規模：鉄筋コンクリート造 高さ9.5m、幅5.7m

建設年：昭和7(1932)年

設計・施工：稲葉郡用排水普通水利組合

文化財指定等：岐阜県近代化遺産

参考資料：『岐阜県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書』(1996)、『岐阜市史(通史編 近世)』(1981)、『ふるさとの歴史こぼれ話「忠節用水」』(橋村 健・後藤征夫) (2014)

ツ屋公園付近にあったものが1933年頃、上流で金華山麓の鏡岩に付け替えられたという。

大正初期までの「忠節用水」は750ヘクタール余りの耕地を潤し、農業用水として網の目のようにつながっていた。

大正6(1917)年に樋門の改築工事が行われ、同時に用水の一部はコンクリートでつくり変えられ

た。1955年頃になると、ほとんどはコンクリートで蓋をされるようになって、地上からも見られなくなり、その存在が忘れられてしまった。なお現在でも岐阜公園付近(護国神社前、萬松館裏)では用水を確認することができる。

山上 薫(JIA愛知) | 山上建築設計



第20回 まちとすまいの集い

現代中国の建築・都市

JIA 東海支部後援

日 時：2018年12月15日(土) 13:20～17:15

場 所：名古屋大学環境総合館1階レクチャーホール

参加費：無料(定員100名)

プログラム：

13:30 主催者挨拶(建築学教室主任 丸山一平)

13:35 趣旨説明(まちとすまいの集い幹事 小松尚)

13:40 講演①「自作から考える中国の現代建築」(講師:銭 強 氏)

14:25 講演②「中国で生きる日本人設計者の『処世術』」

(講師:東福 大輔 氏)

15:10 講演③「持続発展社会に求められる建築の在り方—中国のグリーン建築について」(講師:譚 洪衛 氏)

16:10 3氏によるクロストーク

コーディネータ 西澤泰彦(環境学研究科教授・副研究科長)

17:10 閉会挨拶

※なお、12:30より減災ギャラリー(減災館1・2階)をご覧ください。

申込方法：必要事項を記入(お名前、ご所属、ご住所、TEL/FAX/E-mail)を記入の上、下記までE-mail、FAXまたは郵送にてお申し込み下さい。12月11日(火)を締切とさせていただきます。

申込先：

名古屋大学建築学教室 まちとすまいの集い事務局(担当:穂積)

〒464-8603 名古屋市中種区不老町 C2-④

TEL 052-789-5233 FAX 052-789-3773

Email machi@nuac.nagoya-u.ac.jp

主 催：

名古屋大学大学院環境学研究科 都市環境学専攻 建築学教室

後 援：

日本建築学会東海支部、日本建築家協会東海支部、愛知建築士会、名古屋まちづくり公社、空気調和・衛生工学会中部支部、建築設備技術者協会中部支部、日本建築構造技術者協会中部支部

50周年記念シンポジウム

中部建築賞の50年

CPD2 単位予定

日 時：2018年12月10日(月) 13:00～14:30(12:30開場)

場 所：名鉄ニューグランドホテル7F

参加費：聴講無料 定員140名(先着順)

※表彰式終了後の懇親会は有料

登壇者：

五十嵐太郎(東北大学大学院工学研究科教授)

栗生明(栗生総合計画事務所代表取締役・千葉大学名誉教授)

鈴木利明(一級建築士事務所デザインズキ代表)

瀬口哲夫(名古屋市立大学名誉教授・名古屋CDフォーラム代表)

水野一郎(金沢工業大学教授)

申込方法：

必要事項を記入(お名前、ご所属、TEL/FAX)を記入の上、下記までFAXにてお申し込み下さい。シンポジウム後の表彰式・懇親会に参加の方は申込時に併せてお知らせください。

申込先：中部建築賞協議会事務局

TEL 052-262-0838 FAX 052-262-0839

地域会だより

<東海支部>

10/27 東海支部設計競技1次審査

11/30～12/1 フレッシュマンセミナー

12/8 東海支部設計競技2次審査・表彰式・記念講演会

12/18 近畿支部との交流会

<静岡>

10/26 静岡地域会役員会

11/29 静岡地域会役員会

<愛知>

10/18 事業委員会「猪高小学校建築教室」第1回

10/18 NAGOYA Archi Fes 連続レクチャー「田中義彰」

10/26 法人協力会「CPD研修」

11/2 愛知まちなみ建築賞選考会

11/13 研修委員会「建築セミナー」

11/18 住宅研究会「連続環境セミナー」第3回

11/20 事業委員会「猪高小学校建築教室」第2回

<岐阜>

10/18 愛知地域会 事業委員会 猪高小学校建築教室への参加

10/25 JIA岐阜第6回役員会

11/20 愛知地域会 事業委員会 猪高小学校建築教室への参加

<三重>

11/17 建築ウォッチング 尾鷲ツアー

11/19 みえの気候風土適応住宅勉強会

11/21 三重短期大学において戸建住宅設計指導協力

11月 第4回三重県との防災協定締結に関する協議

12/7 第5回例会、会員研修 会員発表会

弔りこころ、大切な葬儀

葬儀のこと、お応えします。

一柳の葬儀は、各種・価格を段階的に用意いたし、ご希望される予算に合わせてお見積りいたします。宗教・宗派、葬儀規模の大小にかかわらず、全ての葬儀に丁寧にお応えしています。

いちやなぎ斎場は、365日・24時間、いつでも病院・施設等から直接入れます。

いちやなぎ中央斎場

名古屋市千種区千種二丁目19番1号
TEL (052) 745-1212

いちやなぎ野並斎場

名古屋市天白区野並三丁目538番1号
TEL (052) 899-0111

◆葬儀のお申し込み◆お問い合わせ◆事前相談は

TEL.052-251-9296

365日・24時間 一柳のスタッフが対応いたします!

日本建築家協会東海支部 特約店



株式
会社

一柳葬具總本店

<http://www.ichinagi-sogou.co.jp>

イチヤナギ倶楽部

- 入会金1万円のみで掛金不要、基本価格の2割引と交通事故傷害保険の特典取得
- 相続、遺言、後見制度など相談先の紹介が受けられます



編集後記

●このところ『ARCHITECT』は必要ですか? と毎号誌面で問いかけとアナウンスをさせていただき、11月に会員各位にお願いしたアンケートを現在ブリテン委員会で集計しています。30年の歴史を有する当誌に「継続」「休刊」の可能性も示されています。編集を担当するブリテン委員会としては読者各位が『ARCHITECT』にどのような意見や思いがあるのかを知る貴重な機会と位置づけて注意深く結果を分析しています。現状維持、隔月季刊、電子化など、会員の総意と『ARCHITECT』の今後を探るべく客観的スタンスで結果を受け止めています。アンケートの回答率は11月中旬で愛知43%その他地域会が31~33%の状況で、総意としての判断に届かない大変寂しい回答

率です。多数決的判断が全てとは思いませんが貴重な会費により会の状況を皆さまにお知らせする会報誌です。年明け開催予定の会員集会で大いに語っていただきたいと思います。(伊藤彰彦)

●丸栄の解体が決まった際に、「建築学会は保存要望書を出しましたが、JIAは出さないのですか?」と聞くと「会の中でもいろいろな意見があるから…」と返されたのを覚えている。建築家の団体が、社会への意思表示に消極的というのは、見ていてもどかしい。『ARCHITECT』の編集をしても、活動報告やアーカイブとしての媒体なのか、会員外への発信まで行いたいという趣旨なのか、柱が見えない。最初は情熱と明確な目的をもって始まった機関誌であったのは間違いないが、30年刊行し続けてきた中で、発刊自体が目的となり軸がぶれていったのではないかと。先月のブリテン委員会で

は編集方針を今一度明確にするという話が出た。『ARCHITECT』存続議論をきっかけに、JIAの活動全体を含め良い方向へ生まれ変われると感じている。(山崎太資)

ARCHITECT

第363号

発行日 2018.12.1 (毎月1回発行)

定価 380円 (税込み)

発行責任者 矢田義典

編集責任者 中澤賢一

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703

TEL (052) 971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>